

第5号

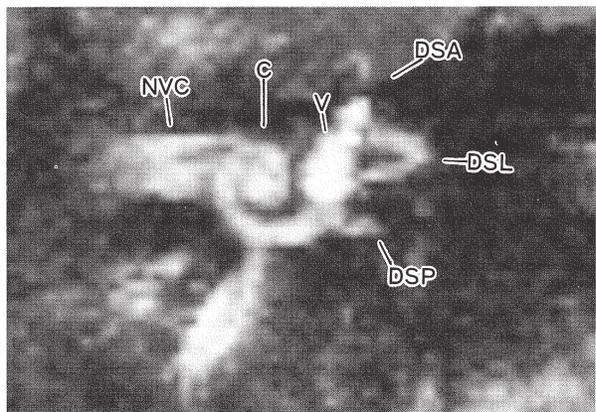
さくらしま

1991



鹿児島大学医学部 耳鼻咽喉科学教室

〔表紙写真の説明〕



MR I で撮影した正常内耳の三次元立体再構築像

NVC : 内耳神経

C : 蝸牛

V : 前庭

DS : 半規管

は し が き

1991年は、湾岸戦争のニュースで幕が開けた。幸い予想を覆して短期間に終息し、平和への歩みが始まった。世界中の人々が安堵した。第2次世界大戦の終結時に、当時の名宰相、チャーチル氏が語った言葉の一節に、「デモクラシーは最悪の政治形態である、しかし独裁者の出現を防ぐことだけはできる」というものがある。最近の東ヨーロッパ政情や湾岸戦争などの経緯をみてもなるほどなづける。

しかし、政治の世界ではそうであるかもしれないが、学問や医療の分野では逆にデモクラシーの果す役割は非常に大きい。小さくは教室単位、研究グループ単位、病院単位とそのどれをとっても個人プレーは許されず、むしろチーム作業によって前進して来たものとする。たゞ、その中であって、わが国の場合、デモクラシーの確立によって失いつつあるものも少なくない。日本人としてのアイデンティティーである。「義理、人情」「以心伝心」「敬天愛人」などを核とした日本的な心象風土がそれに当る。

最近、わが国を含めて先進諸国で、やたらと「Quality of life」とか「normalization」なる言葉が唱えられている。前者は“生活の質”とか“人生の質”とかに訳されている。後者は“普通にする”“正常化”などと訳されている。しかし、これらの理念は対象となる個人によって質の内容や程度が異なり万人に共通のものがある筈はない。

この辺りに、21世紀に向けた大きな命題が提起されているものと思う。日本的な心情に再度立ち帰り、きめ細かい配慮とさりげない協力の心が必要と考える。高齢化社会、国際化、先端医療化が進む社会にあって、そう思っているのは私一人ではあるまい。志と心をもった“未来志向型”の行動に今こそ邁進すべき時代と考える。今後とも皆様の相変らぬ御指導と御支援を心から願います。

平成3年4月7日

大 山 勝

目 次

は し が き	
I. 教室来訪者	1
II. 教室行事	2
1. 主催した学会	
2. 鹿児島耳鼻咽喉科臨床会	
III. 地域医療協力	3
1. 巡回診療	
2. 身体障害者巡回相談	
3. 学校保健	
4. 学校検診報告	
IV. 各省庁諸研究	11
V. 業 績	12
1. 論文発表	
2. 著 書	
3. 研究報告書	
4. 学位論文要旨	
5. 国際学会発表	
6. 国内学会発表	
VI. 医局通信	34
1. 味覚・嗅覚外来の新設	
2. 留学生通信	
オランダ事情	
3. 国際学会報告	
(1) 麗しのアトランタ (2) 韓国紀行	
4. 新入医局員紹介	
VII. 医局内人事	47
VIII. 関連病院	49
IX. 同門会および教室員名簿	52
編集後記	

I. 教室来訪者（平成2年1月～12月）

1 月	京都大学医学部耳鼻咽喉科	本庄 徹 教授
2 月	U.S.A., Minnesota Univ.	Dr. T. Morizono
4 月	Holland, Univ. Hosp. Utrecht 名古屋市立大学医学部耳鼻咽喉科	Prof. J. E. Veldman 馬場 駿吉 教授
5 月	延世大学耳鼻咽喉科	朴 仁 勇 教授
6 月	三重大学耳鼻咽喉科	坂倉 康夫 教授
10 月	Denmark, Gentofte Hosp. Korea, Seoul National Univ. Tailand, Rajvithi Hosp.	Dr. N. Rasmussen Associate Prof. K. H. Kim Dr. J. Y. Kim Dr. M. W. Sung Dr. H. J. Dohng Dr. P. Sannikorn Dr. K. Komin Dr. J. Chokdumrongsuk

II. 教室行事

1. 主催した学会

第17回 日耳鼻南九州合同地方部会学術講演会

平成2年4月14日（城山観光ホテル）

第42回 日本気管食道科学会学術講演会

平成2年10月12日～13日（城山観光ホテル）

2. 鹿児島耳鼻咽喉科臨床会

第42回例会（1／18）

特別講演：耳管の病態と治療

本庄 巖教授（京都大学耳鼻咽喉科）

第43回例会（3／27）

特別講演：急性感音難聴の診断と治療

立木 孝教授（岩手医科大学耳鼻咽喉科）

第44回例会（5／10）

特別講演：副鼻腔気管支症候群－上気道と下気道の相関性について－

江頭洋祐先生（公立玉名中央病院）

第45回例会（6／12）

特別講演：慢性中耳炎の化学療法について

松永 喬教授（奈良県立医科大学耳鼻咽喉科）

小児副鼻腔炎の診断と治療

坂倉康夫教授（三重大学医学部耳鼻咽喉科）

第46回例会（11／17）

特別講演：味覚の生理：vertebrate taste function

J. Caprio 教授（ルイジアナ州立大学）

滲出性中耳炎の過去・現在・未来

D. J. Lim 教授（オハイオ州立大学）

Ⅲ. 地域医療協力

1. 巡回診療（県医務課）

十島村（3月5日～10日）

下甌村（6月12日～14日）

三島村（7月1日～6日）

上甌村（9月11日～14日）

2. 身体障害者巡回相談

1月 樋脇町，笠利町，大和村，住用村

2月 竜郷町

4月 入来町，福山町，志布志町

5月 三島村，野田町，加世田市

6月 喜入町，上甌村，里村

7月 祁答院町，末吉町，与論町

8月 高山町，垂水市

9月 和泊町，知名町

10月 宮之城町，菱刈町

11月 開聞町，川内市，中種子町，南種子町，西之表市

12月 有明町，田代町，徳之島町，天城町，伊仙町

3. 学校保健

鹿児島市，始良町，穎娃町，末吉町，市来町，垂水市，輝北町

4. 学校検診報告

平成2年度耳鼻咽喉科学校検診の結果について

江川 雅彦, 渡邊 莊郁

平成2年度の鹿児島大学医学部耳鼻咽喉科教室が担当した鹿児島県下の耳鼻咽喉科学校検診（離島検診を除く）は平成2年5月より6月にかけて行われた。その検診結果を集計し、男女別、地域別、学年別等で解析した。

<対象と方法>

本年度に実施した地域は鹿児島市、垂水市、穎娃町、始良町、末吉町、市来町、輝北町の7市町で、受診者総数は15,725人であった（表1）。離島は分析には加えなかった。地区別の受診者数に昨年度と大きな変動はなかった。検診対象者は表2に示す通り、4歳児から大学2年に及ぶが、昨年度と同じく、小学校で1年、3年、5年のみ、中学校、高校で1年、3年のみのところがいくつかあったため、学年別の受診者数には、ややばらつきがあった。

検診の方法及び対象疾患については例年と同様である。

表1 各市町別の受診状況		表2 各学年別の受診状況	
地 域	受診者数 (人)	学 年	受診者数 (人)
鹿児島市	7,532	幼稚園 4歳	40
垂水市	2,551	5歳	67
市来町	1,044	小学 1年	1,514
始良町	2,348	2年	819
穎娃町	621	3年	1,609
末吉町	1,497	4年	786
輝北町	132	5年	1,720
計	15,725	6年	812
		中学 1年	1,833
		2年	808
		3年	1,151
		高校 1年	1,988
		2年	714
		3年	1,476
		大学 1年	196
		2年	192
		計	15,725

<結 果>

個々の疾患の全受診者の有病率および男女別の有病率をみると（図1），全受診者および男女別とも昨年度と同様に鼻アレルギーが圧倒的に多く全受診者の10.4%を占め，次に耳垢栓塞（3.8%），慢性副鼻腔炎（2.9%），の順であった。男女別の有病率については，例年と同様，全体的に女性より男性の方が有病率が高い傾向にあり，慢性中耳炎，鼻中隔彎曲症，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎においては有意に女性より男性の有病率が高かった。

図2と図3は鼻疾患及び耳疾患について学年別の推移を比較したものである。鼻疾患では（図2），慢性鼻炎と慢性副鼻腔炎では学年が進むにつれて有病率が減少する傾向にあり，鼻中隔彎曲症では年齢と共に増加する傾向にある。鼻アレルギーにおいては全般的に高い有病率を示し，特定の傾向は認められなかった。耳疾患では（図3），耳垢栓塞と滲出性中耳炎は学年が進むにつれて有病率が緩やかに減少する傾向にあるが，慢性中耳炎においては，年齢による大きな変化がみられず，いずれの年齢においても有病率が1%以下であった。

図1 男女別有病率

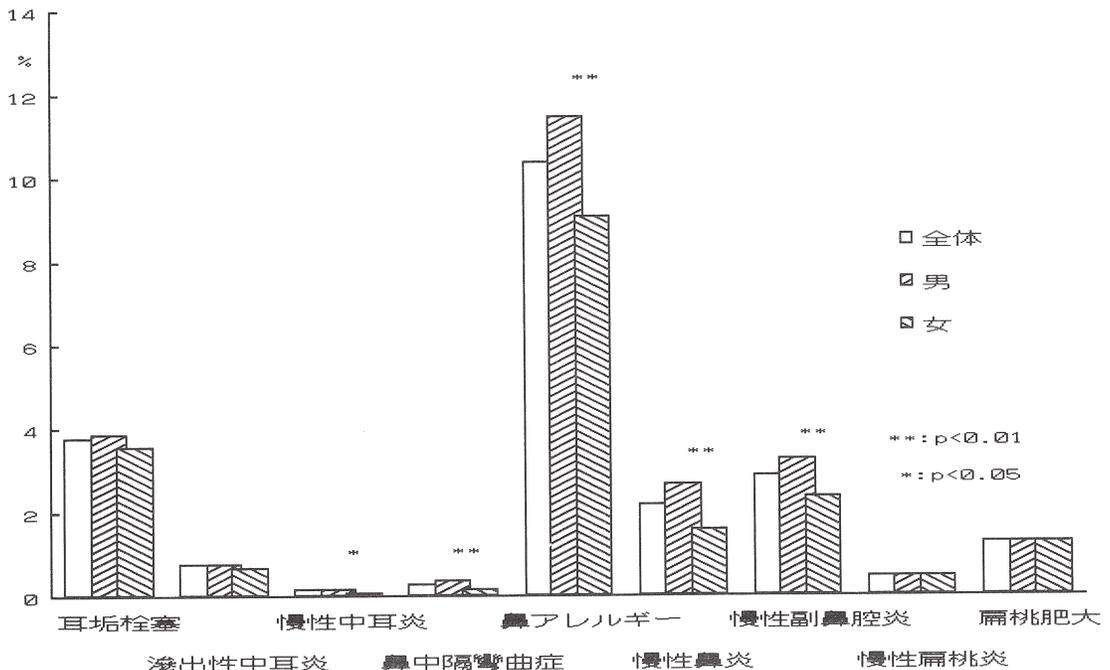


図2 年齢別有病率（鼻疾患）

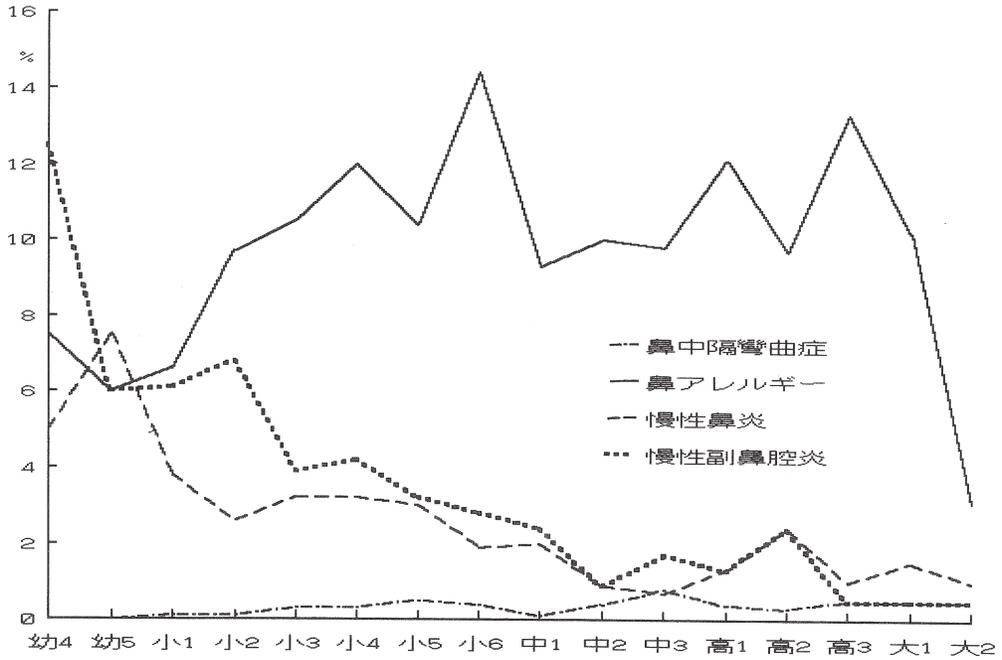


図3 年齢別有病率（耳疾患）

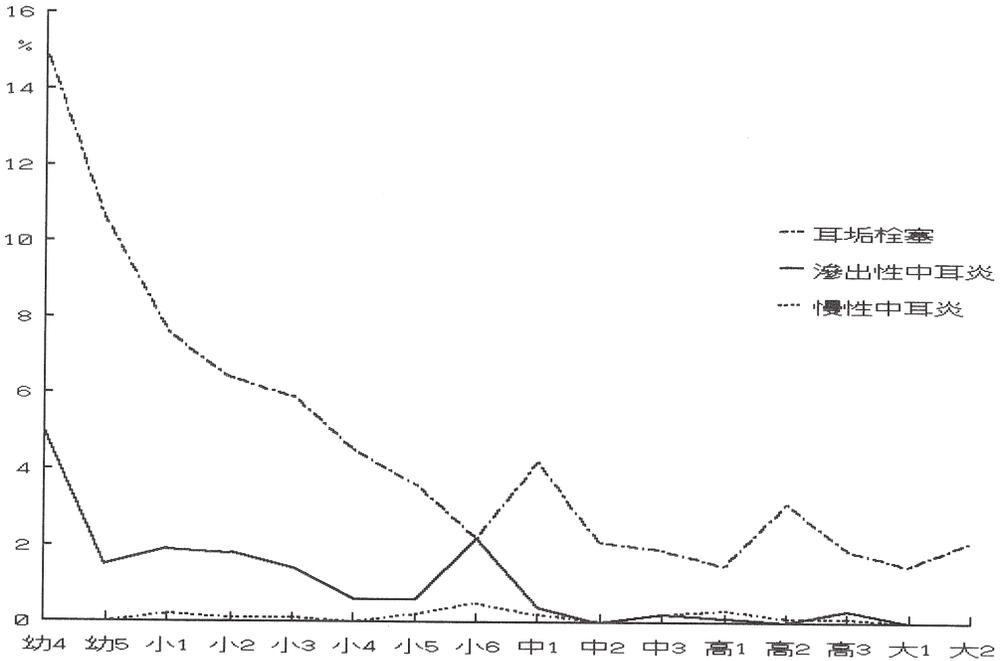


図4 各疾患の地域別有病率

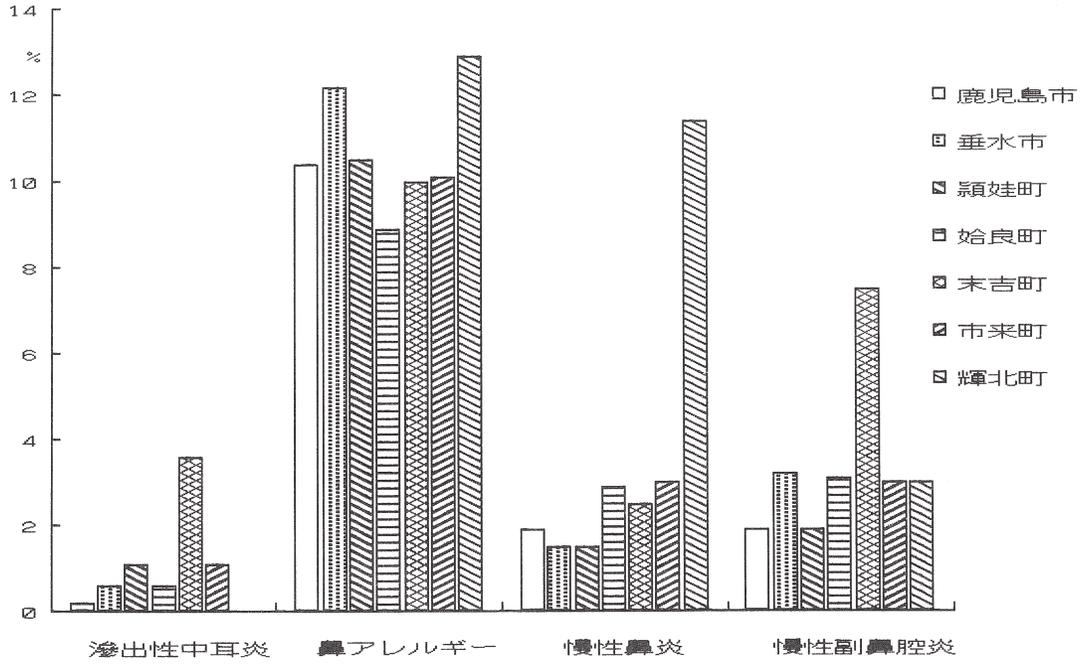


図5 人口密度別有病率（幼稚園、小・中学校のみ）

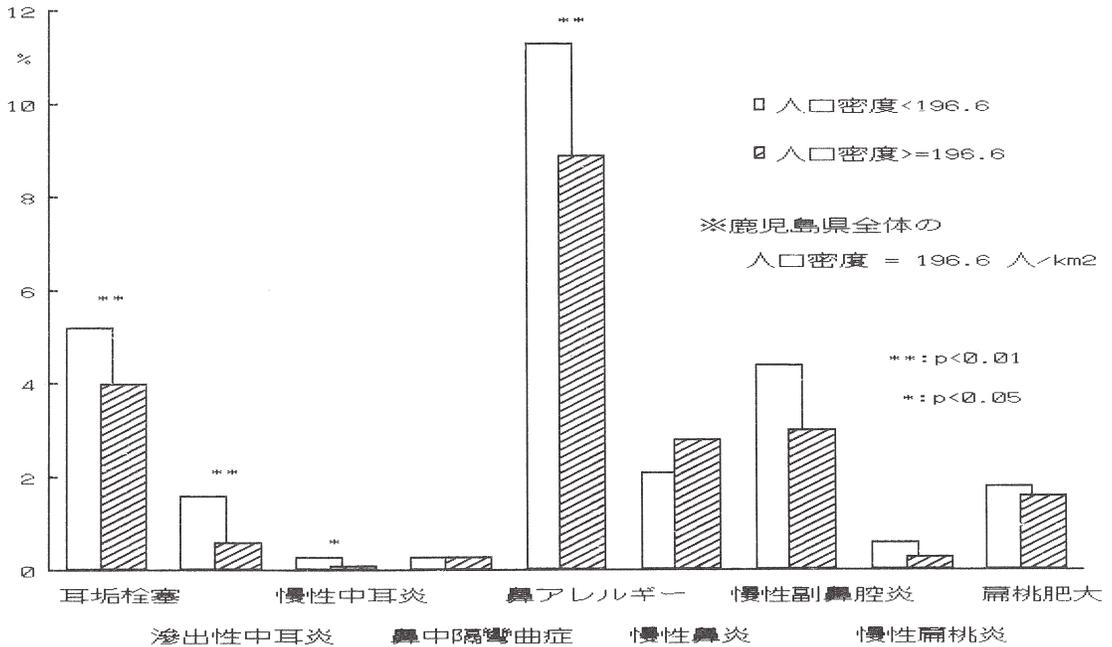


図6 市部・郡部別有病率（幼稚園、小・中学校のみ）

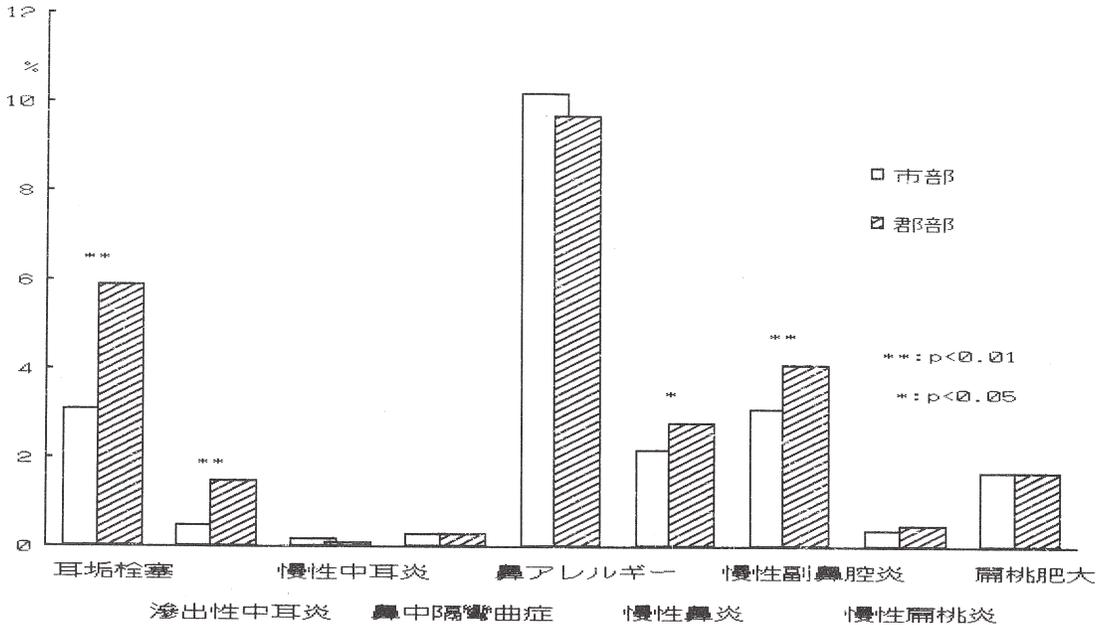


図4は滲出性中耳炎，鼻アレルギー，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎における地域別の有病率を比較したものである。各疾患とも地域毎の有病率の差が大きいが，最も有病率の高い地域をあげると，滲出性中耳炎は末吉町（3.6%），鼻アレルギーは輝北町（12.9%），慢性鼻炎は輝北町（11.4%），慢性副鼻腔炎は末吉町（7.5%）であった。ちなみに他の疾患では，耳垢栓塞が輝北町（10.6%），慢性中耳炎は輝北町（0.8%），鼻中隔彎曲症は鹿児島市，阿久根市（0.4%），慢性扁桃炎は市来町（1.0%），扁桃肥大は輝北町（3.8%）であった。

地域の有病率に関連して，各地域の人口密度（平成2年度国勢調査）を基に有病率の検討を行った。鹿児島県全体の人口密度（平成2年度 196.6人/km²）を中心として，それより高い群（鹿児島市，市来町，始良町）と低い群（垂水市，穎娃町，末吉町，輝北町）の2つのグループに分けた。図5に示すように耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性中耳炎，鼻アレルギーでは人口密度の低い地域で有病率が有意に高かった。

また，地域を市部（鹿児島市，垂水市）と郡部（穎娃町，始良町，末吉町，市来町，輝北町）に分けて比較検討すると（図6），耳垢栓塞，滲出性中耳炎，慢性鼻炎，慢性副鼻腔炎において郡部の有病率が有意に高かった。図7は，小・中学校の全校生徒数を

図7 全校生徒数別有病率（小・中学校のみ）

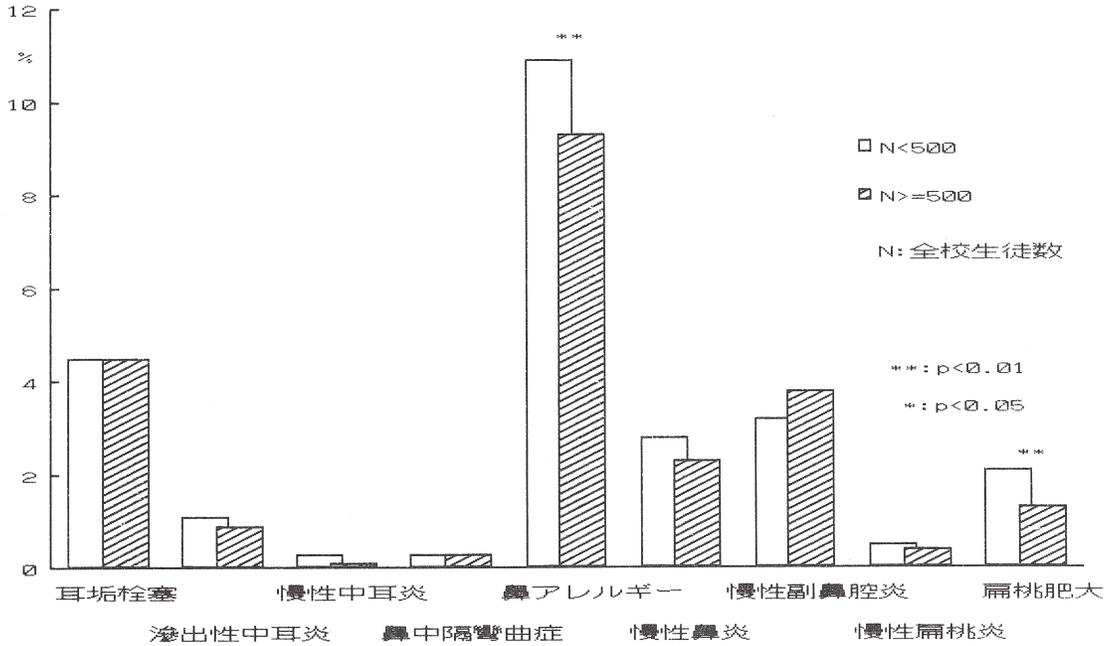
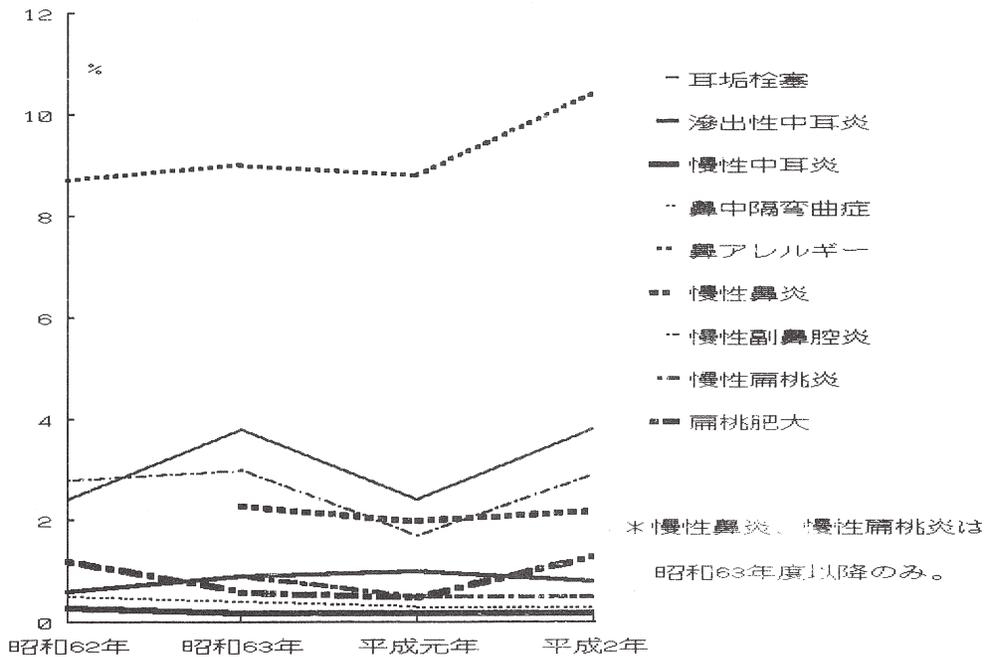


図8 有病率の推移



500人を中心にして分け検討したものである。他の学年は、地域の特殊性や他の地域からの生徒の流入等を考えて除外した。鼻アレルギーと扁桃肥大において全校生徒数500人未満の学校で、有意に有病率が高かった。

図8は昭和62年度から平成2年度までの有病率の推移を示したものである。この4年間の変化を見ると、鼻アレルギーはやや増加の傾向を示しているが、その他はほぼ横ばいの傾向を示している。

<考 察>

平成2年度の学校検診の集計から得られた結果をまとめると、まず第一に、一昨年度、昨年度と同じく、鼻アレルギーの有病率が他の疾患に比較して格段に高く、人口密度別で鼻アレルギーの有病率を見ると、人口密度の低い方で、市部・郡部別では市部に、全校生徒数別では生徒数の少ない群にそれぞれ有意に有病率が高かった。

第2に、昨年度と同様に鼻アレルギー、慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎などの鼻疾患において、加えて今年度は慢性中耳炎、鼻中隔彎曲症についても有意に男性の有病率が高かった。

第3に、有病率の年齢的变化で昨年度と同じく、年齢と共に減少傾向のある疾患と、そうでない疾患とに分けることができた。耳垢栓塞、滲出性中耳炎、慢性鼻炎、慢性副鼻腔炎では年齢の上昇に伴う有病率の明らかな減少が認められ、全般にはほぼ、なだらかな減少傾向を示している。

第4に、4年間の有病率の推移では明らかな減少あるいは増加といった傾向が認められなかった。鼻アレルギーの患者の増加については、最近よく指摘されることであり、今回の結果はこれと一致している。今後も有病率の推移を観察していく必要があると思われる。

IV. 各省庁諸研究

○文部省科学研究費

1. 一般研究 (C)

鼻茸成因とアラキドン酸代謝に関する基礎的ならびに臨床的研究

島 哲也

2. 奨励研究 (A)

Nd:YAG レーザーによる神経及び皮膚の無縫吻合合法に関する研究

小川 和昭

○文部省科学研究費

海外学術研究 (癌特別調査) (第3年次)

タイ国における若年性喉頭乳頭腫の疫学調査研究

大山 勝 (班長)

○文部省臨床特別研究

老年者疾患の病態と治療に関する総合的、臨床的研究

—とくに老人性痴呆症を中心に—

大山 勝 (代表)

○厚生省厚生科学研究

花粉症における予防・治療に関する研究

大山 勝 (班員)

○環境庁班研究

1) 水俣病に関する総合的研究

大山 勝 (班員)

2) 水俣病検診・審査促進に関する調査研究

大山 勝 (班員)

V. 業 績

1. 論文発表

- 1) M. Ohyama, T. Nobori and Y. Hanamura : A study of the Influence of Ofloxacin on Cochlea after Topical Administration into the Middle Ear Cavity of Guinea Pigs. Extracted from the Proceedings of the 16th International Congress of Chemotherapy, June 1989 Israel : 372.1-372.2, 1990.
- 2) M. Ohyama, S. Antrasena, S. Sonoda, H. Yoshida, H. Oda, T. Fujiyoshi, M. Ushikai, M. Kono, A. Sorasuchart and P. Sanikorn : Juvenile Laryngeal Papillomatosis in Thailand. Proceedings of MONBUSHO 1989 International Symposium, Epidemiology and Prevention of Cancer 53-59, 1990.
- 3) 大山 勝 : 舌癌に対するレーザーサーミア, 耳鼻臨床, 83(10) ; 1482-1483, 1990.
- 4) 大山 勝 : 局所薬剤療法之功罪, 治療, 72(9) ; 1832-1836, 1990.
- 5) 大山 勝, 昇 卓夫, 花牟礼豊, 島 哲也, 河野もと子, 原口兼明, 飯田富美子, 宮之原郁代, 廣田里香子, 松崎信行, 小幡悦朗, 深水浩三 : オフロキサシン耳用液の小児・外耳炎に対する治療効果, 耳鼻と臨床, 36 ; 605-623, 1990.
- 6) 河村正三, 大山 勝, 飯田富美子, 鶴丸浩士, 矢野博美, 伊東一則, 松永信也, 他 : OFLOXACIN 耳用液の化膿性中耳炎に対する早期第二相臨床試験成績, 耳鼻と臨床, 36 ; 523-536, 1990.
- 7) 大山 勝, 福田勝則, 鯨坂孝二, 矢野博美, 伊東一則, 松山博文, 深水浩三, 鈴木晴博, 内藺明裕, 松崎 勉, 大野文夫 : 鼻アレルギーに対する KETOTIFEN 点鼻液の臨床検討, 耳鼻咽喉科展望, 33(S-2), 103-112, 1990.
- 8) 大山 勝 : 慢性副鼻腔炎の漢方治療, JOHNS 6 ; 555-558, 1990.
- 9) 大山 勝 : 鼻アレルギーの局所温熱エアロゾル療法, アレルギーの臨床, 10 ; 205-206, 1990.
- 10) 大山 勝, 松村益美, 勝田兼司, 昇 卓夫, 松山博文, 深水浩三, 清田隆二, 矢野博美, 島 哲也, 小川和昭, 大野文夫, 花田武浩, 今給黎泰二郎, 村野健三, 松崎 勉, 宮之原郁代 : 頭頸部癌における UFT 腸溶顆粒 (E 顆粒) と UFT カプセルの副作用に関する比較試験, とくに上部消化器系副作用を中心に, 癌と化学療法, 17 ; 1211-1216, 1990.

- 11) 大山 勝, 福田勝則, 島 哲也, 松崎 勉, 金 春順: 鼻茸の病態からみた治療法, 耳鼻咽喉科・頭頸部外科, 62; 1149-1155, 1990.
- 12) 大山 勝: 手術のコツ; 喉頭微細手術, 日耳鼻, 93; 2080-2081, 1990.
- 13) T. Nobori and I. Moriyama: Laserthermia on Head and Neck Malignancies. Hyperthermia Oncology in Japan, 92-94, 1989.
- 14) 昇 卓夫, 小川和昭, 森山一郎, 大山 勝: 口腔・咽頭腫瘍に対する接触型 Nd: YAG レーザー手術, 日本レーザー医学会誌, 10(3); 295-298, 1989.
- 15) 昇 卓夫: 主要症状からみた検査の進め方50 口臭, JOHNS 6(11); 1481-1482, 1990.
- 16) 昇 卓夫: 耳鼻咽喉科・頭頸科におけるレーザーの過去・現在・未来, LIVE LIFE 美薈, No. 14; 9-12, 1990.
- 17) S. Furuta, J. Hirota, E. Obata and M. Ohyama: Influence of Brain Tumors on the Blink Reflex. Facial Nerve 143-145, 1989. (Proceedings of the Sixth International Symposium on the Facial Nerve, Brazil)
- 18) 古田 茂: 慢性副鼻腔炎に対する各種薬物療法, 日本鼻科学会誌, 27(2); 339-340, 1989.
- 19) Y. Hanamura, H. Tsurumaru, H. Nishizono and M. Ohyama: Adherence of Pseudomonas Aeruginosa to Nasal Mucosa and Sialic Acid. J. Clin. Electron Microscopy 22; 5-6, 1990.
- 20) 花牟礼豊, 坂本邦彦, 鶴丸浩士, 大山 勝: 気道粘膜における細菌の付着, 第2回気道病態シンポジウム, 53-58, 1990.
- 21) E. Obata, S. Furuta, M. Ohyama and P. Sanikorn: Clinical application of the face EMG topogram. Facial Nerve 179-181, 1990. (Proceedings of the Sixth International Symposium on the Facial nerve, Brazil)
- 22) 坂本邦彦: 頭頸部における干渉低周波の作用, 干渉低周波の作用と安全性: 頭頸部領域における基礎的研究(第1部), Therapeutic Research, 11(9); 2964-2966, 1990.
- 23) 坂本邦彦, 今泉正臣, 鈴木正和, 皆内康広, 島 哲也, 大山 勝: らい患者の顔面及び手の皮膚血流測定成績, サーモグラムとの比較検討, 日本らい学会雑誌, 59; 73, 1990.

- 24) 小川和昭：薬剤性内耳障害とその予防に関する研究，耳鼻臨床，83(11)；1725－1735，1990.
- 25) 小川和昭，渡邊莊郁，岩淵康雄，原口兼明，廣田常治，昇 卓夫，大山 勝：顔面神経減荷術後の感音難聴，日耳鼻，93；716－722，1990.
- 26) 大野文夫，坂本邦彦，島 哲也，渡邊莊郁，大山 勝：環境圧とチンパノメトリー，高圧環境下におけるチンパノグラムの変化，耳鼻咽喉科展望，33(3)；197－202，1990.
- 27) 大野文夫，鈴木晴博，勝田兼司：慢性中耳炎の上鼓室疎通性の術前診断，インピーダンスオージオメトリーの応用，耳鼻臨床，83(10)；1503－1509，1990.
- 28) 村野健三，渡邊莊郁，徳重栄一郎，原口兼明，大山 勝：サル喉頭における Substance-P と CGRP の分布，頭頸部自律神経，4；91－93，1990.
- 29) 伊東一則，松永信也，松崎 勉，今村洋子，大山 勝：慢性副鼻腔炎の白血球接着因子に関する検討，Therapeutic Research 11(9)；3040－3045，1990.
- 30) K. Ueno and DJ. Lim : Glycoconjugates in the Tubotympanum Revealed by Lectin-Gold Complexes. In Lim DJ, ed. Abst Thirteenth ARO Midwinter Meeting. 41－42, 1990.
- 31) KH. Park, K. Ueno and DJ. Lim : Developmental Study of Murine Tubotympanum. In Lim DJ, ed. Abst Thirteenth ARO Midwinter Meeting ; 40－41, 1990.
- 32) 内藪明裕，大山 勝：耳鼻咽喉科頭頸部外科領域におけるMRSA感染症，化学療法領域，6(6)；1195－1201，1990.
- 33) 内藪明裕，渡邊莊郁，坂本邦彦，昇 卓夫，大山 勝：高齢者におけるOFLXの唾液中移行濃度について，医学と薬学，24(2)；519－522，1990.
- 34) 内藪明裕，福田勝則，伊東一則，牛飼雅人，大山 勝：鼻副鼻腔悪性リンパ腫の臨床的免疫学的検討，日本耳鼻咽喉科学会会報，93；554－565，1990.
- 35) 内藪明裕，大山 勝，西順一郎，吉永正夫，宮田晃一郎，宮之原弘晃，出口浩一：鹿児島大学病院および耳鼻咽喉科頭頸部外科領域のMRSAの現況について，臨床病理，38(9)；998－1004，1990.
- 36) 松永信也：慢性副鼻腔炎鼻汁の好中球活性酸素産生能に及ぼす影響，日本炎症学会雑誌，10(5)；393－399，1990.

- 37) 松永信也, 大山 勝: 慢性副鼻腔炎鼻汁と好中球機能について, Therapeutic Research 11(9); 3046-3051, 1990.
- 38) 松永信也, 大山 勝: 慢性副鼻腔炎における好中球の役割, 臨床と研究, 67(6); 177, 1990.
- 39) 森山一郎: 口蓋扁桃の Nd:YAG レーザー剥離子を用いた全摘術, 日本扁桃研究会, 29; 168-170, 1990.
- 40) 原口兼明, 渡邊莊郁, 村野健三, 岩淵康雄, 徳重栄一郎, 花牟礼豊, 大山 勝: 口蓋扁桃の嚥下時動態の観察, 日本扁桃研究会, 29; 113-117, 1990.
- 41) 松根彰志, 鶴丸浩士, 花牟礼豊, 牛飼雅人, 今村洋子: 副鼻腔炎における Cefmenoxim (CMX) 局注効果 - 家兎を用いた組織化学的観察 -, 耳鼻臨床, 83(1); 119-128, 1990.
- 42) N. Yamaguchi, I. Sando, Y. Hashida, H. Takahashi and S. Matsune: Histologic Study of Eustachian Tube Cartilage with and without Congenital Anomalies. Ann. Otol. Rhinol. Laryngol 99; 984-987, 1990.
- 43) 河野もと子, 廣田常治, 今給黎泰二郎, 古田 茂, 大山 勝: 曾於郡医師会立病院耳鼻科におけるアレルギー外来の現況, 第11回九州耳鼻咽喉科免疫アレルギー懇話会, 耳鼻と臨床, 36(2); 290-293, 1990.
- 44) 岩淵康雄, 清田隆二, 昇 卓夫, 大山 勝: 頸部胸腺嚢胞の一例, 頭頸部腫瘍, 16(2); 82-85, 1990.
- 45) 徳重栄一郎, 小川和昭, 昇 卓夫, 大山 勝: 鼻咽腔血管線維腫症例, 接触型 Nd:YAG レーザーの使用経験, 耳鼻臨床, 83(9); 1415-1421, 1990.

2. 著 書

1) 大山 勝

検査法の実際と判定のしかた - 鼻汁塗抹検査 -

耳鼻咽喉科・頭頸部外科 MOOK, 15・鼻科一般検査法, 金子敏郎編
金原出版(東京) p60-66, 1990.

2) 大山 勝

味覚障害

今日の治療指針1990, 医学書院(東京) p785, 1990.

- 3) 大山 勝
アレルギー性鼻炎と副鼻腔炎の合併例の治療
アレルギー性鼻炎と花粉症の診療, 齊藤洋三編
臨床医薬研究会 (東京) p176-177, 1990.
- 4) 大山 勝
人体組織学 3. 咽頭と喉頭
人体組織学 呼吸器・泌尿器 朝倉書店 (東京) p31-36.
- 5) 大山 勝
アレルギー性副鼻腔炎
アレルギー談話室, Nov. 18, 1990.
- 6) 大山 勝
分科学会総会から - 日本気管食道学会 -
ラジオたんぱ「医学講座」Oct. 29, 1990.
- 7) 大山 勝
太陽を見るとくしゃみの起こる患者がいます。光によるアレルギーでしょうか
気道疾患 Q&A, p8-9, 1990.
- 8) 大山 勝
アレルギー性鼻炎と副鼻腔炎の合併例の治療
気道疾患 Q&A, p176-177, 1990.
- 9) 坂本邦彦
らいと耳鼻咽喉科
第14回ハンセン病医学夏期大学講座教本
第14回ハンセン病医学夏期大学講座実行委員会編
国立療養所多摩全生園 (東京) p67-70, 1990.
- 10) 坂本邦彦
気道粘液線毛機能の測定法-in vivo 光学電氣的測定法及び光音響測定法-
関東喀痰研究会記録集, 長岡 滋 ほか編
関東喀痰研究会 (東京) p43-50, 1990.
- 11) K. Sakamoto, T. Shima, M. Ohyama and M. Suzuki
Three Cases of Lasersurgery on Long Term Laryngeal Stenosis Caused

by Leprosy.

Recent Advance in Bronchoesophagology. Edit. T. Inoue et al, Elsevier Publishers B. V., p495-496, 1990.

- 12) R. Kiyota, K. Sakamoto, K. Mizoi, S. Furuta, T. Nobori and M. Ohyama
An Observation of the Mucociliary Transport on a Bird's-eye View (VIDEO PHOTOGRAPH).
Recent Advances in Bronchoesophagology 57, 1990.

3. 研究報告書

- 1) 大山 勝, 渡邊莊郁, 島 哲也, 田口信教*, 芝山秀太郎* (*鹿屋体育大学)
低圧環境下における水泳運動負荷の正常聴器における鼻粘膜粘液纖毛輸送能に及ぼす影響の検討 -第2報-
平成元年度文部省特定研究報告書.
- 2) 花田武浩
実験動物アレルギーの臨床的, 免疫学的検討, 特にモルモット上気道アレルギーを中心に
昭和63から平成元年度化学研究費補助金研究成果報告書 21-32, 1990. (耳鼻臨床 82(10); 1453-1464. を転載)
- 3) 伊東一則, 昇 卓夫, 大山 勝
鹿児島大学医学部附属病院耳鼻咽喉科における最近一年間の動注化学療法の効果.
血管内手術の研究
平成元年度臨床研究報告書 5-6.

4. 学位論文要旨

圧と耳管開閉能 —音響耳管機能検査法による測定—
圧暴露が正常聴器に及ぼす影響
—主に聴力ならびにチンパノメトリーについて—

大野 文 夫

人間の行動範囲の拡大に伴い、様々な環境圧に暴露される機会が増え、それに伴う種々の障害が報告されている。なかでも、耳管の換気能不全から起こる中耳障害や内耳障害はよく知られているが、実際に環境圧の変化や中耳圧の変化が正常聴器に及ぼす影響を論じた報告は極めて少ない。そこで、著者は、圧が正常聴器に及ぼす影響を明らかにするため、1：環境圧と耳管換気能、2：中耳内圧と耳管換気能、3：高压暴露が正常聴器に及ぼす影響について検討した。

- 1) 環境圧と耳管換気能：正常成人男子21名42耳を対象として、大型高压治療装置内で0, 5, 15, 20, 30 fsw (feet of seawater) の各環境圧における耳管換気能を音響耳管機能測定装置 WIO-01型を用いて測定した。耳管換気能に関しては能動的耳管開閉能検査として、検査側の鼻入口部に音源スピーカーを当て、同側の外耳道にマイクロホンを装着した状態で自然嚙下を行なわせ、耳管開放持続時間及び音圧変化を測定記録した。また、受動的耳管開閉能検査としては、検査側及び反対側の鼻入口部にそれぞれ圧センサー、音源スピーカーを設置した状態で被験者にバルサルバを行なわせ、耳管開放が起こる瞬間の鼻腔内圧を測定した。
- 2) 中耳内圧と耳管換気能：正常成人男子17名34耳を対象として、大型高压治療装置内において、被験者に嚙下を禁じたまま治療装置内圧を変動(600mmH₂O 以内)させ、中耳内に相対的陽圧又は相対的陰圧を生じさせた。その状態で、音響耳管機能測定装置 WIO-01型を用いて、能動的耳管開閉能及び受動的耳管開閉能を測定した。
- 3) 高压暴露が正常聴器に及ぼす影響：正常成人男子33名66耳を対象として、大型高压治療装置を用いて高压暴露を負荷し、その前後における聴力検査とチンパノメトリーの成績の変化を検索した。その結果、次のような成績が得られた。
 - ① 自然嚙下に伴う耳管開閉能の陽性率は、常圧下(0 fsw)では圧暴露前82.1%、圧暴露後83.3%とほぼ一致しており、5 fswより30 fswまでの環境圧間でも著しい

差は認められなかった。平均耳管開放持続時間や音圧変化でも、環境圧による受動的耳管開閉能の変化は認められなかった。バルサルバによる耳管開閉能陽性率は、いずれの環境圧下においても90%前後と大体一致していた。以上より、中耳内が環境圧と平衡な状態である限り、耳管換気能は環境圧の影響を受けないことが示唆された。

② 中耳内圧の変化による耳管換気能の影響に関しては、自然嚙下による耳管開閉能陽性率は、均圧群、陽性群ではそれぞれ93.6%、93.3%とほぼ等しかったが、中耳内が陰圧である軽度陰圧群、高度陰圧群ではそれぞれ83.3%、81.7%と陽性率が低下した。平均耳管開放持続時間は均圧群の436.0 msec に比して軽度陰圧群、高度陰圧群ではそれぞれ410.7 msec、356.4 msec と有意に短縮する傾向が認められた。バルサルバによる耳管開閉能陽性率についても高度陰圧群で明らかに低下していた。これら現象の局所因子として、中耳粘膜の腫脹と耳管粘膜の鼓室内への嵌入が考えられた。しかし、中耳内が陽圧の場合には、耳管換気能の著しい変化は認められなかった。

③ 圧暴露後に測定したオージオグラムは圧暴露前のものに比して、全ての症例で有意な聴力レベルの変化は認められなかった。チンパノメトリー検査では、圧暴露前後とも、全ての耳においてA型のチンパノグラムが得られ、中耳内圧には有意な変化は認められなかった。一方平均中耳等価容量は圧暴露前0.611ccであったものが圧暴露直後には0.693ccと有意に上昇した。このことは、圧暴露による鼓膜コンプライアンスの上昇を反映しているものと推察した。しかしながら、圧暴露直後に上昇していた平均中耳等価容量は、24時間後には圧暴露前の平均値とほぼ等しい値に回復していた。耳管機能に関しては、自然嚙下に伴う平均耳管開放持続時間は、圧暴露前に比して圧暴露後では明らかに短縮し、バルサルバによる耳管開閉能陽性率も、圧暴露前に比して圧暴露後は低下した。

以上より、圧暴露によって鼓膜のコンプライアンスは上昇し、24時間後にはかなり回復することが示唆された。又、圧暴露によって、能動的及び受動的耳管開閉能はいずれも低下することが判明した。これらの研究成績は圧環境と中耳機能、特に耳管機能との関係で、その影響と問題点を明らかにしたものである。

鼻粘膜のリポキシゲナーゼ代謝に関する検討

—鼻副鼻腔の慢性炎症に関して—

島 哲 也

アラキドン酸の代謝は、最初に、シクロオキシゲナーゼまたはリポキシゲナーゼのいずれかの酵素の働きを受け、2経路に大別される。前者は、プロスタグランジン (PG) やトロンボキサン (TX) 等を代謝し、後者はロイコトリエン (LT) やハイドロキシエイコサテトラエン酸 (HETE) 等を産生する。特にLTやHETEの生理活性に関して、ここ10年の間に精力的な研究が行われ、炎症あるいはアレルギー反応を担う化学伝達物質群の重要な一員であることが明らかになってきた。

一方、鼻副鼻腔粘膜の炎症やアレルギー疾患の病態にも、これらアラキドン酸代謝物が深く関与していることが予想される。現在までに、シクロオキシゲナーゼ代謝物のPG, TXと鼻アレルギーの関係を検討した報告はなされているが、鼻副鼻腔の炎症性疾患とリポキシゲナーゼ代謝物のLT, HETEを検討した研究は内外を通じて未だこれをみない。そこで著者は、鼻副鼻腔の粘膜あるいは分泌物を検体としてアラキドン酸のリポキシゲナーゼ代謝物を定量する方法を検討するとともに、得られた成績をもとにリポキシゲナーゼ代謝物の鼻副鼻腔粘膜の炎症への関与を検討した。

対象には、鼻汁、貯留液検体として、慢性副鼻腔炎由来の鼻汁、術後性頬部嚢胞貯留液を用いた。また、組織検体として、慢性副鼻腔炎の鼻茸、上顎洞粘膜、慢性肥厚性鼻炎由来の下甲介を用いた。検索したリポキシゲナーゼ代謝物は、5-HETE, 12-HETE, 15-HETE, LTB_4 , LTC_4 , LTD_4 , LTE_4 の7物質を選択した。これらの物質の抽出方法は、その物理化学的性質の違いにより、HETE類と LTB_4 群、 LTC_4 , LTD_4 , LTE_4 群の2群に分けて行った。前者は、高速液体クロマトグラフィー法で定量し、スペクトロフォトメトリーを用いて同定した。後者は、モルモット回腸を用いた生物学的方法により定量した。

その結果、次のような成績が得られた。

- 1) LTB_4 の平均値は、いずれの種類を検体からも10 ng/g以上の成績が得られた。
- 2) 5-HETEの平均値は、鼻茸を除いた他の種類の検体から、100 ng/g前後の成績が得られた。
- 3) 12-HETEの平均値は、組織検体、貯留液検体とも検索した7物質のなかでは高

かったが、15-HETEは、組織検体中では高値にもかかわらず、貯留液中では低値という特徴的な成績が得られた。

4) LTC₄, LTD₄は、1 ng/g 以下の成績が主であり、7物質のなかではもっとも低値であった。

5) LTE₄は、数10 ng/g の定量成績であった。

以上の成績より、まず、LTB₄、5-HETEは、その生理活性である好中球遊走能を発現し得る濃度で鼻副鼻腔の炎症性粘膜および鼻汁、貯留液中に存在することが示され、この2物質が細胞遊走の点で粘膜の炎症に関与していることが示唆された。12-HETE、15-HETEの粘膜における生理活性は未だ明確ではないが、この2物質の代謝が優位であることから、粘膜の炎症に重要な働きを有していることが示唆された。特徴的な成績が認められた15-HETEは、リポキシゲナーゼ代謝の調節に関与しているとされ、この物質の粘膜での作用の解明は重要と思われた。LTC₄、LTD₄、LTE₄は主にI型アレルギー反応の化学伝達物質とされているが、最近の炎症モデル等の成績から、慢性炎症の化学伝達物質として重要であることが強調されている。本成績においても、I型アレルギー反応の否定された検体より検出され、粘膜の炎症反応においても関与が示唆された。以上は、鼻副鼻腔の炎症におけるリポキシゲナーゼ代謝の複雑かつ密接な関与が窺われる成績と思われ、今後このような疾患を扱うに際し、リポキシゲナーゼ代謝も考慮したアプローチが必要と考えられる。

5. 国際学会発表

- ◇THE THAI-JAPAN ENT CLINICAL CONFERENCE 1月8日 (タイ)
『Experimental Study on the Reduction Effect of Idebenone on Gentamicin
Ototoxicity』
K. Ogawa
- ◇13TH ARO MIDWINTER MEETING 2月4日～8日 (フロリダ)
『Glycoconjugates in the Tubotympanum Revealed by Lectin-Gold Complex』
K. Ueno and D. J. Lim
『Developmental Study of Murine Tubotympanum』
K. H. Park and K. Ueno
- ◇3RD CONGRESS ASIAN PACIFIC ASSOCIATION FOR LASER MEDICINE
AND SURGERY 3月25日～28日 (バリ)
『Contact Nd:YAG Laser Surgery in Oropharynx』
T. Nobori
- ◇ACHEMS-1990 4月18日～22日 (サラソタ)
『Ibotenic Acid Lesions of the Dorsomedial Hypothalamic Nuclei Induce En-
hanced Taste Aversion Learning』
S. Furuta and D. A. Deems
- ◇ISIAN 6月24日～29日 (ロンドン)
『Laser in Rhinology』
M. Ohyama
『Effect of Nasal Secretion of Chronic Sinusitis on Neutrophil Oxygen Meta-
bolite Production』
S. Matsunaga and M. Ohyama

『Adherence of Pseudomonas Aeruginosa on Nasal Mucosa』

M. Ohyama, Y. Hanamure, H. Tsurumaru and H. Nishizono

◇3RD INTERNATIONAL SYMPOSIUM ON NEW QUINOLONES

7月12日～14日 (バンクーバー)

『Experimental Study on the Distribution of OFLX into the Brain after Topical Administration to the Middle Ear Cavity』

O. Okazaki, T. Kuraha and T. Nobori

『A Clinical Study of OFLX Otic Solution in Child Patients with Otitis Media and Externa』

M. Ohyama, T. Nobori and T. Shima

◇THE OHIO STATE UNIVERSITY LECTURE 7月20日 (オハイオ)

『Recent Advantages in Laser Surgery in ENT Regions』

M. Ohyama

◇15TH INTERNATIONAL CANCER CONGRESS

8月16日～22日 (ハンブルグ)

『A Phase 2 Study of Futraful (FT-207) Suppository for Head and Neck Cancer』

M. Ohyama, M. Matsumura, K. Katsuta, T. Nobori, S. Furuta,
S. Matsunaga, A. Uchizono, T. Hanada, I. Moriyama, S. Kamachi,
H. Yano, K. Ueno, M. Hashimoto, S. Ohno, H. Saito and J. Hirota

◇RESEARCH FORUM AT THE 94TH ANNUAL MEETING OF AMERICAN ACADEMY OF OTOLARYNGOLOGY-HEAD AND NECK SURGERY

9月9日～13日 (サンディエゴ)

『Lateral Cartilaginous Lamina and Lumen are Abnormal in Cleft Palate Eustachian Tubes』

S. Mathune, I. Sando and H. Takahashi

◇LOW POWER LASER IN MEDICINE '90 TOKYO 9月21日～23日 (東京)

『Laserthermia Symposium ENT』

I. Moriyama

『Laserthermia on Head and Neck Malignancies Experimental and Clinical Studies』

I. Moriyama

『Skin Approximation Using Nd:YAG Laser in Head and Neck Surgery』

H. Nishizono

◇30TH INTERSCIENCE CONFERENCE ON ANTIMICROBIAL AGENTS
AND CHEMOTHERAPY 10月21日～24日 (アトランタ)

『Penetration of Sparfloxacin (AT-4140) into the Tissues and Secretions in Bacterial Infections in the Otolaryngological Field』

A. Uchizono, T. Shima and M. Ohyama

◇THE THIRD KOREA-JAPAN JOINT MEETING OF OTOLARYNGOLOGY
HEAD AND NECK SURGERY 10月25日～26日 (ソラクサン)

『Experimental Study on the Reduction Effect of Idebenone on Gentamicin Ototoxicity』

K. Ogawa, H. Nishizono, H. Tsurumaru and Y. Hanamura

『Immunohistochemical Study on the Olfactory Bulb of Animal Model of Alzheimer's Disease』

Seung-Kyu Chung, K. Murano and M. Ohyama

『Observation on the Movement of Palatine Tonsil during Swallowing』

K. Haraguchi, S. Watanabe, K. Murano, Y. Iwabuchi and M. Ohyama

『Virological Study on Juvenile Laryngeal Papillomatosis in Thailand』

M. Ushikai, M. Kohno and M. Ohyama

◇IMMUNOBIOLOGY IN OTOLOGY, RHINOLOGY AND LARYNGOLOGY
3RD INTERNATIONAL ACADEMIC CONFERENCE

11月8日～10日（サンディエゴ）

『Effect of Nasal Secretion in Chronic Sinusitis on Neutrophil Oxygen Metabolite Production』

S. Matsunaga

『A Study of Leukocyte Adherence to Vascular Endothelium in Nasal Secretion of Chronic Sinusitis』

K. Itoh, Y. Imamura and M. Ohyama

『Virological Study of Juvenile Laryngeal Papillomatosis in Thailand』

M. Ushikai, M. Kohno and M. Ohyama

◇CONTACT LASER HANDS-ON TRAINING COURSE 12月1日（ホンコン）

『Contact Laser Surgery in ENT』

『Laserthermia to Treat Cancer』

M. Ohyama and I. Moriyama

6. 国内学会発表

◇第10回鹿児島大学医学会集談会

1月17日（鹿児島）

『上気道粘膜への細菌付着機構に関する研究』

花牟礼豊, 鶴丸浩士, 西園浩文, 大山 勝

◇第2回気道病態シンポジウム

1月20日（東京）

『気道粘膜における細菌の付着』

花牟礼豊, 坂本邦彦, 鶴丸浩士, 大山 勝

◇第7回九州耳鳴研究会

2月3日（博多）

『各種薬剤の耳鳴に対する効果』

渡邊莊郁, 岩淵康雄, 原口兼明, 清田隆二, 大山 勝

『耳鳴患者の長期経過』

清田隆二, 渡邊莊郁, 岩淵康雄, 原口兼明, 村野健三, 大山 勝

◇第10回気道分泌研究会

2月24日（鳴門）

特別講演

『干渉低周波の作用と安全性 頭頸部領域における干渉低周波の作用』

坂本邦彦

『副鼻腔炎鼻汁中の白血球接着因子に関する検討』

伊東一則, 松永信也, 松崎 勉, 今村洋子, 大山 勝

『慢性副鼻腔炎鼻汁と白血球機能について』

松永信也, 内藺明裕, 島 哲也, 古田 茂, 大山 勝

◇第2回日本喉頭科学会

3月23日（東京）

『サル喉頭における Substance P と CGRP の分布』

村野健三, 渡邊莊郁, 徳重栄一郎, 原口兼明, 昇 卓夫, 大山 勝

◇第8回耳鼻咽喉科免疫アレルギー研究会

3月29日～31日（東京）

『タイ国における若年性喉頭乳頭腫のウイルス学的検索』

牛飼雅人, 河野もと子, 大山 勝

『モルモットにおける人のアレルギー症』

花田武浩, 島 哲也, 清田隆二, 大山 勝

◇第17回日耳鼻南九州合同地方部会学術講演会

4月14日（鹿児島）

『水俣病患者の聴力障害』

福島泰裕, 渡邊莊郁, 村野健三, 岩淵康雄, 小川和昭, 大山 勝

『MRI によって病巣確認された中枢性めまいの2症例について』

鹿島直子, 原口兼明, 松村益美

『離島診療所で経験した耳鼻咽喉科疾患症例の検討』

河野正樹

『突発性難聴に対するデフィブラーゼの使用経験について』

西園浩文, 大野文夫, 鈴木晴博, 勝田兼司

『慢性中耳炎耳における上鼓室－中鼓室間の交通の術前評価について』

大野文夫, 勝田兼司

『当科におけるMRSA感染症の現状について』

内藺明裕, 伊東一則, 今給黎泰二郎, 今村洋子, 宮之原郁代, 大山 勝

◇第63回日本らい学会

4月14日～15日(東京)

『らい患者の顔面及び手の皮膚血流測定成績－サーモグラムとの比較検討』

坂本邦彦, 今泉正臣, 鈴木正和, 皆内康広, 島 哲也

◇第54回日耳鼻鹿児島県地方部会学術講演会

4月22日(鹿児島)

『両側性感音難聴の臨床的検討』

岩淵康雄, 渡邊莊郁, 小川和昭, 大山 勝

『自律神経失調の関与するめまい, 耳鳴症例について』

清田隆二, 岩淵康雄, 鯉坂孝二

『当科における過去3年間の喉頭癌の臨床的検討』

鈴木晴博, 勝田兼司, 坂本邦彦

『顔面神経麻痺に対する手術治療について』

勝田兼司, 大野文夫, 鈴木晴博, 西園浩文

『上顎に発生したCementifying Fibromaの一症例』

松村益美, 鹿島直子, 原口兼明

◇第91回日本耳鼻咽喉科学会総会学術講演会

5月17日～19日(東京)

教育パネル

『アレルギー性疾患に対する減感作療法の問題点』

大山 勝

シンポジウム2 慢性副鼻腔炎の手術 UP-TO-DATE

『副鼻腔炎のレーザー手術』

昇 卓夫

『ゲンタマイシン耳毒性に対するイデベノンの軽減効果』

小川和昭, 渡邊莊郁, 原口兼明, 鯉坂孝二, 岩淵康雄, 鶴丸浩士, 大山 勝

『副鼻腔炎鼻汁中の白血球接着因子に関する検討』

伊東一則, 松永信也, 松崎 勉, 今村洋子, 大山 勝

『レーザーサーミアの基礎と光化学療法』

森山一郎, 西園浩文, 宮之原郁代, 福島泰裕, 大山 勝

『入院患者の抗H T L V - I 抗体価の統計的観察』

内菌明裕, 牛飼雅人, 河野もと子, 大山 勝

◇第4回 Bacterial Adherence 研究会

7月7日(東京)

『ヒト鼻粘膜への緑膿菌付着性について』

花牟礼豊, 西園浩文, 今給黎泰二郎, 大山 勝

◇セルテクト研究会

6月8日(鹿児島)

『耳鼻科領域におけるセルテクトの使用経験』

河野もと子, 西園浩文, 牛飼雅人, 内菌明裕, 大山 勝

◇第52回耳鼻咽喉科臨床学会総会, 学術講演会

(久留米)

パネルディスカッション

『21世紀耳鼻咽喉科開業医の予測像』

大山 勝

『頸部打撲により発生した咽後間隙血腫の一例』

原口兼明, 鹿島直子, 松村益美

◇第11回日本炎症学会

7月20日~21日(東京)

ワークショップ

『アレルギー性鼻炎』

島 哲也, 伊東一則, 大山 勝

『副鼻腔炎における血管内皮細胞の病態への関わり』

伊東一則

◇ロメバクト発売記念講演会

7月27日(鹿児島)

『ロメバクトの耳鼻咽喉科領域感染症に対する臨床効果』

伊東一則

- ◇第1回耳鼻咽喉科と老化の研究会 8月8日(東京)
『アルツハイマー病ラット嗅球の組織化学的研究』
村野健三, 鄭 勝圭, 大山 勝
- ◇ベーリングネフェロメーター講演会 8月25日(大阪)
『上気道アレルギーの病態と治療ー血中Ig Eの動態を中心にー』
大山 勝
- ◇第5回九州ブロック連合地方部会学術講演会 9月1日~2日(長崎)
『副鼻腔疾患における鼻汁中IL-1の検討』
伊東一則, 西園浩文, 徳重栄一郎, 松崎 勉, 大山 勝
『扁桃と喉頭組織における肥満細胞の定量的検討』
金 春順, 花牟礼豊, 大山 勝
『Immunohistochemical Observations on Substance-P and Serotonin in
Taste Bud-like Structures in the Monkey Larynx』
Preedee Ngaotepprutaram, 村野健三, 鄭 勝圭, 金 春順, 花牟礼豊,
大山 勝
- ◇第3回日本口腔・咽頭科学会学術講演会 9月8日~9日(千葉)
『高齢者におけるOFLXの唾液中移行濃度について』
渡邊莊郁, 内菌明裕, 坂本邦彦, 昇 卓夫, 大山 勝
『化学療法剤の扁桃組織への移行とその組織構造との関連』
金 春順, 内菌明裕, 大山 勝
『咽喉頭異常感症の超音波診断』
原口兼明, 渡邊莊郁, 村野健三, 坂本邦彦, 古田 茂, 昇 卓夫, 大山 勝
『幼児の舌に発生した嚢胞の一例』
今村洋子, 牛飼雅人, 西園浩文, 花牟礼豊
『舌に発生した悪性リンパ腫の一症例』
宮之原郁代, 内菌明裕, 廣田里香子, 昇 卓夫

◇第22回日本臨床電子顕微鏡学会

9月19日～21日（大津）

『ヒト鼻粘膜由来培養上皮細胞の電顕的観察』

花牟礼豊，西園浩文，鶴丸浩士，徳重栄一郎，大山 勝

『ヒト鼻粘膜由来血管内皮細胞の観察』

西園浩文，鶴丸浩士，花牟礼豊，今村洋子，大山 勝

『Gentamicine による内耳障害に対する Idebenone の抑制効果の形態学的，電気生理学的研究』

小川和昭，西園浩文，鶴丸浩士，花牟礼豊，大山 勝

◇第29回日本鼻科学会サテライトシンポジウム

9月27日（宇都宮）

『鼻粘膜過敏性の成因をめぐって -Chemical Mediator を中心に-』

坂本邦彦

◇第29回日本鼻科学会 基礎問題研究会シンポジウム

9月27日～29日（宇都宮）

『鼻茸の成因について 鼻茸成因におけるアラキドン産代謝物の関与』

島 哲也

『ヒト鼻粘膜上皮細胞の培養』

花牟礼豊，徳重栄一郎，西園浩文，大山 勝

『Lepromatous leprosy の一例』

坂本邦彦，後藤正道，島 哲也，今泉正臣，鈴木正和

『副鼻腔の sagittal および semiaxial CT』

鄭 勝圭，坂本邦彦，成 耆俊，朴 仁勇，大山 勝

『干渉低周波療法の頭頸部領域への応用』

今給黎泰二郎，坂本邦彦，清田隆二，大山 勝，溝井一敏

◇第19回医学生物学のための走査電顕シンポジウム

10月4日～6日（大山）

『レーザー皮膚接合部治癒過程の走査電顕的観察』

西園浩文，鶴丸浩士，花牟礼豊，大山 勝

◇第20回日本耳鼻咽喉科感染症研究会

10月6日（奈良）

『当科におけるMRSA感染症の現状について』

内菌明裕, 伊東一則, 今給黎泰二郎, 今村洋子, 宮之原郁代, 大山 勝

『当科における結核症例』

鶴丸浩士, 内菌明裕, 坂本邦彦, 大山 勝

◇第42回日本気管食道科学会サテライト気道液シンポジウム

10月11日（鹿児島）

『鼻汁による間葉系細胞の機能修飾』

伊東一則

◇第42回日本気管食道科学会学術講演会

『タイ国の若年性喉頭乳頭腫におけるヒトパピローマウイルスの検索』

牛飼雅人, 河野もと子, 園田俊郎, 大山 勝

『両側反回神経麻痺に対するレーザーコルドトミーの試み』

大野文夫, 小川和昭, 森山一郎, 西園浩文, 大山 勝

『らい患者の喉頭神経障害』

坂本邦彦, 松永信也, 岩淵康雄, 渡邊莊郁, 宮之原郁代

『鎖骨を用いた気管形成の一症例』

廣田常治, 花牟礼豊, 内菌明裕, 廣田里香子, 徳重栄一郎, 大山 勝

『食道穿孔をきたした異物症例』

西園浩文, 今村洋子, 伊東一則, 大山 勝

◇始良郡医師会生涯教育講座

10月16日（始良町）

『頸部腫瘤』

昇 卓夫

◇長崎県耳鼻咽喉科医会学術講演会

10月17日（長崎）

『21世紀の耳鼻科医の話』

大山 勝

◇第13回鹿児島感染症研究会 10月27日（鹿児島）

『当科におけるMRSA感染症の現状について』

内菌明裕, 伊東一則, 今給黎泰二郎, 今村洋子, 宮之原郁代, 大山 勝,
宮之原弘晃

◇第35回聴覚医学会 11月1日（東京）

『キシロカイン静注による耳鳴増強例について』

清田隆二

◇第11回日本レーザー医学会 11月8日～9日（金沢）

シンポジウム2 低エネルギーレーザーにおける創傷治癒

『Nd:YAG レーザーによる皮膚接合』

小川和昭

シンポジウム4 レーザー治療におけるハイパーサーミア

『耳鼻咽喉科, 頭頸科領域におけるレーザーサーミア』

昇 卓夫

『Nd:YAG レーザーによる皮膚接合』

西園浩文

『両側反回神経麻痺に対するCO₂ レーザー治療』

森山一郎

◇第38回日本ウイルス学会総会 11月12日～14日（東京）

『タイ国の若年性喉頭乳頭腫の研究』

藤吉利信, 牛飼雅人, 河野もと子, 大山 勝, 園田俊郎

◇耳鼻咽喉科, アレルギーのつどい 11月14日（長崎）

『鼻アレルギーの日常診療における治療, レーザー療法』

昇 卓夫

◇第18回日本臨床耳科学会

11月22日～23日（大分）

『慢性中耳炎の上鼓室疎通性について』

大野文夫

『耳鳴患者の長期経過，アンケート調査成績』

清田隆二

『MRIの立体構築画像による内耳疾患診断の試み』

渡邊莊郁

『両側性感音難聴の臨床的検討，特発性両側性感音難聴を中心に』

岩淵康雄

放 送

◇アレルギー談話室 日本アレルギー協会九州支部主催

九州朝日放送 11月18日

『アレルギー性副鼻腔炎』

大山 勝

◇医学講座 日本医師会主催

日本短波放送 10月29日

『第42回日本食道科学会のトピックス』

大山 勝

VI. 医局通信

1. 味覚嗅覚外来の新設

古 田 茂

大山教授がT&Tオルファクトメトリーの開発に、三重大学時代に取り組んでから、早や30年近くが経過した。この間、本教室では、味覚嗅覚関係の基礎的研究が成果を挙げている。大野（聖）の嗅上皮の形態学的研究、鼻の口腔内刺激による誘発脳幹反応の電気生理学的研究、前山の嗅刺激による脳波の電気生理学的研究、小川（敬）の舌の比較解剖学的研究などである。また、比較的味覚嗅覚関係の教室に留学の機会も多く、前山がエアランゲン大学（ドイツ）で、古田がペンシルベニア大学で、小幡がシンシナチ大学で研修を終え、そして、現在、小川（和）がミズリー州立大学にて研修中である。このように研究の体制は整っている。しかし、まだ大きく羽ばたいていないのが現状であろう。その一因に、臨床の場で、味覚嗅覚の専門外来がないため、基礎的研究と臨床が結びついていなかったことが挙げられる。これまでの味覚嗅覚の患者に対しては、嗅覚ではT&Tオルファクトメトリーとアリナミンテストを行っていた。味覚では、電気味覚検査を行っていた。全て、保険制度の範囲にとどまっていた。

欧米では、味覚嗅覚などの感覚障害で受診する患者の割合が日本に比べて多く、その実態は、味覚嗅覚の専門外来で体験した小幡と古田が教室に紹介している。実際、われわれの日常臨床の中でも、味覚嗅覚障害の患者は多い。ただ、それを問診で聞かないために患者は訴えなかったこと、感覚障害を患者も医療サイドも問題視していなかったことが見られている。しかし、quality of lifeの人生感を持つ人々の増加により、今後、感覚障害を主訴とする患者が、耳鼻咽喉科を受診する機会が益々増加する傾向にあることが予測される。したがって、われわれ耳鼻咽喉科医は重要な役割を演じなければならない。このような状況を踏まえて、われわれは味覚嗅覚専門外来を本年1月より開設した。

現在は、第一段階として検査の充実を計ることを目的としている。嗅覚検査として、従来の基準嗅覚検査（T&Tオルファクトメトリー）と静脈性嗅覚検査（アリナミンテスト）に加えて大幅に増やした。針状鏡による嗅上皮の観察、嗅覚識別検査としてUniversity of Pennsylvania Smell Identification Test（UPSIT）を、嗅覚閾値検

査として phenyl ethyl alcohol (PEA) による検査を用いている。そして、他覚的嗅覚検査 (EOG や誘発脳波) の開発に取り組んでいるところである。一方、味覚検査は日本大学を参考にした。電気味覚検査、4 基本味の閾値検査および識別検査、そして、舌の各分画における 4 基本味の閾値上検査を行っている。これらに加えて、顔面神経機能検査や心理性格検査を適宜行っている。また、亜鉛の体内動態についても検討している。さらには嗅覚同様、他覚的味覚検査を検討中である。

以上の味覚嗅覚外来より得られた成績に基づいて、今後、積極的に学会活動を行う予定である。特に、鼻科学会、口腔咽頭科学会と味と匂いのシンポジウムは活動の中心となるであろう。現在進めている研究内容については、まだ発表の段階に達していないので今回は省略する。

味覚嗅覚障害は耳鼻咽喉科疾患に由来するものばかりでない。掘り起こせば、多くの疾患でこれらの感覚障害は見られる。近くて遠い学内を円滑にし、“give and take” で他科の患者の感覚障害を解明したいものである。

皆様方の御協力をお願い申し上げます。

2. 留学生通信

オランダ事情

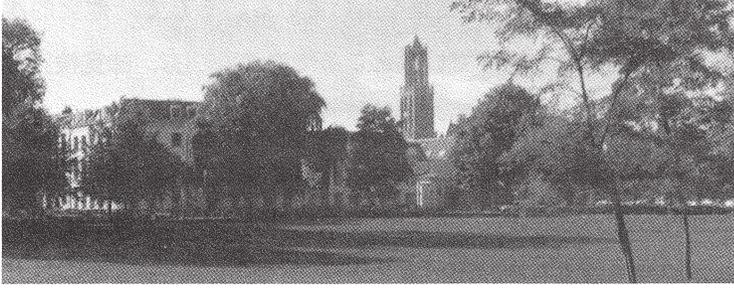
花田武浩

Hoe gaat het met ju Uie? (ごきげんいかがでしょうか。)

日本とは四百年近くの友好関係を持つオランダですが、皆様は何を思い浮かべられますか? 風車、チューリップ、大堤防、ゴッホ? そんな国で、凍れる運河を横目に二度目の春を待ちわびている今日この頃です。

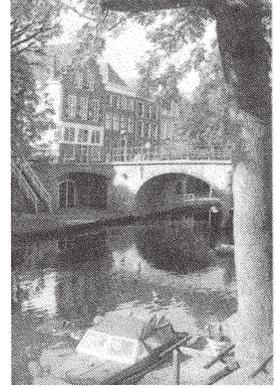
九州とはほぼ同じ面積に、1400万人の人々が住んでいるオランダ。その中央にユトレヒトは位置します。ローマ時代に源をなすこの国第4の都市は、商業都市であると同時にまた大学都市でもあります。中世の香りがただよう街並みに、現在が見事に調和しているユトレヒト、治安も良く (この国全般として)、夜の一人歩きであろうとも何ら危険を感じることはありません。

University Hospital Utrecht (Academisch Ziekenhuis Utrecht, 通称 AZU) は、



上：ユトレヒトの象徴でもあるドーム塔（112m）。この塔のすぐ西側にユトレヒト大学本部があります。

右：オランダでは珍しいことに、運河より4~5m高いところに道路があります。市中心部のオウテグラハト（旧運河）付近



89年に市中心部より郊外へ、近代的にまた大きくなって移転しています。私は、Dr. Veldman の研究室で “auto immune hearing loss” に関する research を行っております。Western blot, immuno histochemistry 等を用いての抗原解析や、患者のスクリーニングテストの開発、またレジデントとともに免疫モデルの作製等を行っております。研究室の優秀なスタッフに支えられて興味ある結果が得られつつあるところです。また併せて temporal bone dissection も行い、自らの貴重な経験としております。

ところで、日本人はアムステルダム周辺には比較的多いのですが、当地には少なく（AZU には私のみ、居住している町にも私達のみ、ユトレヒトに少数が居住しているような状況です。）、日常生活はオランダ語の大洪水の中で送っております。私達が住んでいるような小さな町では、英語も通じないような店もあり、最初は身振り手振りで買物せざるを得なかったりと……。幸いにも隣人の元教師でもあった方がオランダ語を教えてください。ただし時に英語も混じりますがほとんどオランダ語で!?(テキストの説明は常にパフォーマンスと絵によって補われています。) その甲斐もあり、また必要にも迫られて、上達してきているようです。帰国するまでにはより上達して trilingual となることをひそかに期待しているのですが。

さてユトレヒト大学には、International Neighbour Group (ING) という留学生の為の親睦組織があり、ヨーロッパ各地、アジア、アフリカ、北米、オーストラリア等、実に世界中からの留学生が集う機会があります。私も積極的に参加し各国からの留学生とも親交を深めております。

とりとめもなく書いてまいりましたが、当地滞在を機に、ヨーロッパの伝統、歴史の重み等も併せて感じることでできる有意義な生活が送れればと思っております。

3. 国際学会報告

麗しのアトランタ

内 藺 明 裕

坂本先生と私は、大山教授のご好意で1990年10月20日から25日までジョージア州アトランタで開催された30th ICAAC (International Conference on Antimicrobial Agents and Chemotherapy) に行きまして。私たちの発表の内容は、大日本製薬が開発したニューキノロン剤 AT-4140 の当科領域における組織移行の成績をまとめたもので、ポスターセッションでの発表でありました。この学会に参加して、何より驚いたのがその規模の大きさでした。一般演題総数 1,361 題、シンポジウム演題 66 題、参加者数約 15,000 名で、学会場の World Congress Center 前には、学会専用の数種類の路線バスが運行し、地下 2 階に設けられた Display Room には、世界各国の薬品会社や ME 機器メーカーがしのぎを削って presentation 合戦をくりひろげていたのです。メーカーの話だとこの学会で認められることがその商品の評価を決定づけるとのことで、彼らの力のいれようも解る気がしました。ただそれほどの学会が行われているにも関わらず、その Congress Center の中には使われていないドドかい部屋がまだいくつも残っていたのですから、この建物の大きさにも呆れるばかりでありました。興味を引いた演題としては、ニューキノロンとセフェムの合剤の開発が進行中であることや、薬剤耐性の研究、AIDS ウイルスの治療薬の基礎的な研究、STD や Fungus のシンポジウムなどでした。やはり、世界的には、STD がかなり重要視されていることが改めて認識されました。

さて、私たちは、学会の合間をぬって、アトランタの街を見物して歩きました。ジョージア州は、鹿児島県と姉妹盟約を結んでいるそうですが、アトランタとあって、私の頭にすぐ浮かぶのはあの「風と共に去りぬ」の大炎上シーンと無数に横たわる傷ついた兵士たちの姿でありまして、早速、マーガレット・ミッチェルが住んでいたというアパートを捜しにでかけました。アトランタの交通は、むろん自家用車が主体なのですが、そのほかに市民の足となっている大変便利な地下鉄が十字に走っており、初めての、しかも方向音痴の私でさえ、決して迷うことがないほど簡便な輸送機関でした。通称 MARTA (Metropolitan Authorities Rapid Transportation of Atranta) と呼ばれる

その地下鉄はどこまで乗っても料金1ドルで、駅の構内にはゴミがひとかけらも落ちていないし、ましてや、車内に落書きどころか広告の一枚もぶら下がっておらず、映画などでお目にかかる落書きだらけのニューヨークの地下鉄や、いつ乗っても混雑していて、私など路線図を覚えることをはなから諦めてしまう東京の地下鉄と比べると隔絶の感がありました。

MARTAにのって観光地図を頼りにやってきたミッチェル女史の住んでいたというアパートは、高層ビル群のあいなかに、まさかと思うような哀れな姿で建っておりました。窓ガラスは破れて新聞紙で塞いであり、壁はボロボロ、屋根は剥がれてその役目を果たしていないことが一目で解るといった様子でありました。仕方がないのでその前で記念撮影をしましたが、おそらく手入れされていないその建物が、誰も見に来ない（つまり金にならない）ものに対する彼らの合理性と、それでいて取り壊してしまえない、歴史的なものに対する彼らの独特の畏敬の念とをよく現しているのかなと思いました。



ミッチェルハウスの前で

アトランタの街で出色だったのは、アンダーグラウンドと呼ばれる地下街で、ここには、西部開拓時代を偲ばせるようなこぎれいな店や屋台がならんでおり、歩いて回るだけでうきうきする、ちょうどお祭りの夜店に行ったときみたいな気分させてくれる所でありました。私たちは、ホテルから一駅でいけるこの地下街へ何度か足を運びました。ほかには、コカコーラの本社がこの街にあって、記念館なるものをおっ建てて、金を取って見物させておりました。わたくしたちも入ってみました。入場料に見合うものは、なにもありませんでした。ただ、コーラだけは飲み放題でしたから、1リットルも飲めるという人は行ってみてもいいかもしれません。

たった、5日間の滞在でしたが、この街の人々がとても親切で、行く場所さえ誤らなければ、きわめて安全であることを知る機会がなんどかあり、とても過ごし易い街だなという実感でした。とりわけ、坂本先生は、いたく気にいられて、「もう一度きっとくるぞ」と、何度も言うておられました。ただ一つ、やはり困ったのが食事でした。わら

じみたいにでかいステーキと薩摩芋のようなジャガイモにビールの大瓶がゆっくりつげるコーラの紙コップとどれをとっても、見ただけで食欲が失せてしまう代物ばかり。それだけにガイドの方がわざわざ連れて行ってくれた郊外の日本食レストラン（この経営者はなんと宮之城の方でした）のさんまの塩焼のうまかったこと。



日本料理店で

同じ時間なのになんともなくゆったり流れているように感じさせてくれたアトランタの風情に思いを残しつつ、またせわしない日常へと敢然と帰って行く私たちでありました。

韓国紀行

— 第3回日韓耳鼻咽喉科学会に参加して —

徳重栄一郎

1990年10月24日から25日まで、韓国の雪岳山（ソラクサン）にて第3回日韓耳鼻咽喉科学会が開催され、我々の教室より大山教授夫妻を初めとし、他11名が参加しました。鹿児島空港より空路1時間20分でソウル市内にあるKimpo空港に到着し、その近さに韓国が日本に一番近い外国である事を再認識させられました。Kimpo空港には、以前我々の教室で研究をされていた李先生を初め、延世大学の諸先生方が出迎えて下さり感激致しました。

西橋（ソギョウ）ホテルに着くと早速、梨泰院（イーテウォン）通りという観光客相手のショッピング街に連れていってもらい、皮ジャンを買い込む者、ブランド物の財布、バッグ（のコピー）を買い込む者、それぞれショッピングを楽しみました。その夜は、延世大学の先生方が、歓迎会を開いて下さり懇親を深めました。

翌朝、10月24日、学会の開催される雪岳山へ向け飛び立ちました。雪岳山での泊りは、Edelweis Hotelというホテルで、オンドルという韓国古来の床暖房式の部屋と、ダブルベッドの部屋しかなく、なにやら危ないホテルでは？という輩もいましたが、家族連



学会場 (Sorak Park Hotel) にて



Edelweis Hotel にて

れで泊りに来る観光用のホテルということでした。雪岳山は、日本で言えば晩秋の日光の様な、紅葉のきれいな観光地で、韓国の国立公園に指定されており、ちょうどこの季節はシーズン中で観光客が数多くみられました。我々も Welcome Reception の前に、雪岳山観光に行ってきました。ロープウェイで雪岳山に昇ると日本ではお目にかかれないう、中国の水墨画に出てくるような鋭い山々や、真っ赤な紅葉に目を奪われました。

Welcome Reception は、学会の開催される Sorak Park Hotel で行われました。野外での立食パーティーで、ちょっと寒そうにしているとソウル大学の先生方が Second meeting (つまりは二次会) に誘って下さり、東草 (ソクチョ) 市内の料理屋へと行きました。山のように出された刺身に舌つずみを打っておりましたが、その余りの量の多さに最後は少し食傷気味となりました。それでも酒は Soju, 我が鹿児島の焼酎に味も名前も似ており、学問の話に？花が咲きました。

翌25日は、やっと本題の学会で、我が教室からは、小川先生、原口先生、牛飼先生、現在我が教室で留学研究中の鄭先生らが演題を出されました。前日から緊張気味の先生方を後目に、我々傍聴者はパンフレット片手に面白そうな演題を探して回りました。学会参加者は、日本から約100名、韓国から約300名の多人数に及び、演題も、Otology, Otoneurology, Audiology, Facial Nerve, Rhinology, Oral Cavity, Salivary Gland, Pharynx, Larynx, Head & Neck におよび、しかも basic な物から、clinical な物まで多岐にわたっており、内容豊富で、濃厚な学会でした。

学会の夜は、前日同様、東草にて second meeting が行われ、学会参加者のほとんどが出席しました。宴もたけなわになると、カラオケ大会が始まり、韓国、日本の各大学の教授方が、自慢の喉を披露しました。もちろん我が教室の大山教授も18番の「浪花節だよ人生は」で、皆様を酔いしれさせていました。さらに、third meeting ではカラ

オケスナックへ連れて行っていただき、各大学の先生方との友好を深めました。一方、教授方は、他の部屋へと案内され重要議題について話し合われておりました。大山教授は議題内容についてあまり興味を示されなかったのか、すぐに我々のところに舞い戻ってこられ、我々と共に歌い、踊って楽しめました。

翌26日は、雪岳山で温泉につかり、マイクロバスで江陵（カンヌン）目指し韓国東海岸を観光しながら南下しました。海岸線には鉄条網が張られており、分断国家の厳しさを感じさせられました。江陵から飛行機でソウルに向かいましたが、搭乗の時のチェックの厳しさに、中国から我が教室に研究に来られている金先生は、最後までブツブツ文句を並べておりました。

ソウルの夜はまたまた延世大学の先生方に焼肉のお店に連れて行ってもらい、本場の焼肉をいただきました。この後我々はおとなしくホテルに帰りましたが、我が教室の一年目の二人の先生は、韓国の若い先生方とソウルの闇に消えて行きました。どこに行ったのかは二人ともなかなか口を割りません。

翌27日は、Kimpo 空港まで延世大学の先生方にお見送りいただきました。韓国も交通渋滞がひどく、出発時刻ぎりぎりに到着したため、免税店で買物をと考えていた我々は、その期待がはずれ、諦めて手ぶらで帰る者、飛行機を待たせても買物をする者など、先生方の性格が垣間見られました。

このように、韓国の諸先生方には大変御世話になり、感謝の気持ちでいっぱいです。第3回日韓耳鼻咽喉科学会の成功を祝し、また先生方のご苦勞に敬意を表し、この韓国紀行のペンを擱かせていただきます。

4. 新入医局員紹介

江川 雅彦（えがわ まさひこ）

自己紹介：

耳鼻咽喉科の診察と同様、ゴルフの方も上達を目ざして頑張っています。宜しくお願ひします。

鮫 島 篤 史 (さめしま あつし)

自己紹介：

入局以来、いろいろ珍事を繰り広げて、皆様に迷惑をかけてばかりいますが、よろしくおねがいします。

馬場園 真樹子 (ばばぞの まきこ)

自己紹介：

平成2年5月より鹿大耳鼻科にて皆様と一緒にお仕事させて頂いております馬場園真樹子です。

出身は東京都武蔵野市で実家は歯科ですが、歯科医になりたいと思ったことは一度もなく(親不孝お許し下さい)、医者になりたいと思ったのは確か小学校二年の時でした。将来の道を早々と決めた割にはのんびりと、中学・高校は私立の、いわゆるお嬢さん学校で、案の定現役で受けた医学部は全てすべり、一浪の末東京医科大学に入学致しました。在学中は体育会硬式庭球部に属し、大学に何をしに行っているのかわからないと言われる位テニス三昧の日々を送り、それでもどうにかS58年には無事卒業することが出来ました。そして新宿の本院で一年、霞ヶ浦の分院で一年を過ごし、結婚出産と一年余のブランクを経て、茨城県牛久市の私立の総合病院の耳鼻科常勤として三年間勤務致しました。この頃が一番Obenの欲しい時期だったのですが、結局Ope書を師として半自己流でやったり、時々県内の先輩に教えを乞うたりして、とにかく必死でした。いかんせん知識不足、経験不足はどうしようもなく、今回鹿大で温かく迎えて頂いたことを機に一から勉強し直すつもりでおります。移行措置で専門医という肩書が付きましたが、今の私には少し重い感じがするのも事実です。

入局して、最も強く感じることは、大山先生を初めとして医局の先生方が皆様、国際的にも最先端の知識・技術を習得されようとする意欲に溢れて仕事されておられること、そして人間的にも、とても優しく温かい方ばかりで（スタッフも含め）、私としては、背筋のびんとのびる感じを保ちつつ、和気あいあいと仕事ができるという最高の環境にあるということで、心から感謝しております。

この恵まれた環境の中で、一つでも多くのことを確実に学んでいきたいと思っております。どうぞ皆様、御指導の程、宜しくお願い申し上げます。

吉 次 政 彦（よしつぐ まさひこ）

自己紹介：

私が当教室に興味をもったのは、教授の講義中のタイのスライドがきっかけです。しかし卒業後は、ローテート研修がしたく1年半程ポリクリの延長のようなことをしていました。それは非常におもしろいものでしたが、何か物足りなさを感じ入局させてもらったわけです。

私のモットーとして“おもしろき事も無き世をおもしろく”できたらと思っています。

小 溝 久美子（こみぞ くみこ）

自己紹介：

短大卒業後、こちらの教室で働くようになり、早いもので1年が過ぎようとしています。

私は主に、日本耳鼻咽喉科学会鹿児島県地方部会の事務並びに諸手続き、外来の手伝い、図書関係の仕事をしております。どの仕事も大変重要で責任を感じております。当然のことながら失敗も数多くあります。自分でも一番驚いた失敗は、ティンパノの機械のチューブに水を入れてしまったことでした。精密機械に水を入れてしまった…と思い、脳裏には弁償の文字だけが大きく浮かび上り、一生かかって返済するのかと、目の前が真っ暗になってしまいました。結局、業者の方にチューブを交換して頂いただけで直りましたが、それ以来、物を大切に扱うようにしています。

辛いこともありますが、大山教授をはじめ医局の先生方、3人の先輩方はとても優しく温かく、耳鼻科で働くことが出来ることを幸せに思っています。

鄭 勝 圭 (ちゃん すんぎゅう)

自己紹介：

鹿児島大学耳鼻咽喉科で一年余り勉強したことを誇りに思います。大山教授を初め教室の皆様のお陰で何不自由なく楽しい生活を過ごすことができました。ここ鹿児島での生活を通じて少しは『日本』を知ることができました。こちらではこれまでに延世大学の李廷権先生と私がお世話になりました。その私どもの延世大学について簡単にご紹介いたします。延世大学校には2つの医科大学、即ち本学の医科大学と原州医科大学があります。本学の医科大学は5つの病院つまり、新村、永東、仁川、竜仁(?)、広州のseverance病院があります。新村、永東、仁川には常勤医のいる耳鼻科がありますが、他の2つでは1週間2回くらいの診療を行っています。さて、学内のシステムにおいては1945年以降米国から多くの影響を受けてきました。

Staffとして、教授、副教授、助教授、講師(専任、研究)、そして専攻医があります。Staffの場合、ふつう45歳位で教授になりますから、Staffのおよそ半分は教授であることとなります。三つの病院を合わせるとStaff 14名、専攻医20名がfull timeで働いています。また日本とは異なり、教室の運営は一人の教授が全体を統率するのでは

なく、複数の Staff どうしによる協議体の形をとります。

私立大学であるため扱う患者数が多く、研究に当てる時間が少ないのが悩みの種です。けれども忙しいという点では延世大学も鹿児島大学もよく似ています。私たちが日常使用する本は主に英文のものばかりで、case conference 時も本の内容について討論します。また私たちの教室のもう1つの特徴は耳、鼻、頭頸部の3つの part があることです。

以上、簡単に御紹介致しましたが、鹿児島で特に印象に残ったことは次のとおりです。

- 1) 耳鼻科関連の図書の主な部分が医局にある事。
- 2) 学生に対する大山教授のお父さんの的な態度・振る舞い。
- 3) 医局の中に研究室があって、やりたいことがほとんど出来る事。
- 4) 立派な秘書の方々。
- 5) 基礎の教室との密接な関係 などです。

1年余りの長い間お世話になりました。これからも長いおつき合いをよろしく願い申し上げます。

Rautiainen, Markus Esko Peter

Born 1. 12. 1957, Kuopio, Finland. Resident of Finland, Nationality Finnish. Married with Merja Rautiainen, M. E., two sons, one and three years old.

Education : Doctor in Medicine, 1982, University of Kuopio. Medical Second Lieutenant in Finnish Army, 1984. Awarded Status of Specialist in Otorhinolaryngology, 1988, University of Kuopio. Doctor in Medicine and Surgery (Ph.D.), 1990, University of Kuopio.

Appointment : Trainee in Otorhinolaryngology at the University Central Hospital of Kuopio 1984–1988 (heads : Professors Juhani Kärjä and Juhani Nuutinen). ENT-specialist and senior lecturer in Otorhinolaryngology in University of Kuopio 1988–1990. Senior lecturer in Otorhinolaryngology in University of Tampere since 1. 1. 1991.

Scientific research : Scientist of Departments of Pathology (head : Professor Yrjö Collan) and Otorhinolaryngology in University of Kuopio since 1982.

Fellow Researcher in the Department of Otorhinolaryngology in Kagoshima University 1990 –1991 supported by a grant from JSPS (Japan Society for the Promotion of Science).

Scientific research covers papers on the ultrastructure of respiratory cilia. The main interest has been in the ultrastructure of normal cilia and cilia in different respiratory diseases as well as in methods of ciliary studying. In addition the scientific production covers papers on application of morphometric methods in pathology and recently also papers on clinical allergology. One of the papers has been awarded as “the best paper of the year” in Ultrastructural Pathology.

Comments : I have found my Japanese colleagues scientifically very active especially on the field of basic science. It has been very nice to notice that all the doctors and also the trainees are doing research work. One remarkable difference to Finnish hospitals is much longer working time here in Japan. In Finland doctors work at the daytime in hospitals and in the evenings in their private clinics.

VII. 医局内人事 (1991年1月現在)

教授	大山 勝
助教授	昇 卓夫
講師	古田 茂, 花牟礼 豊
助手	福田勝則, 坂本邦彦, 小川和昭, 島 哲也, 内藺明裕, 大野文夫 伊東一則 (歯学部), 松永信也 (歯学部)
医 員	河野もと子
研修医	福島泰裕, 吉次政彦
大学院生	西園浩文, 徳重栄一郎, 廣田里香子, 江川雅彦, 鮫島篤史
外国人客員研究員	Markus Rautiainen (Finland), 鄭 勝圭 (韓国)
研究補助員	片平聖子, 久保輝代, 石窪昌子, 小溝久美子
海外留学中医局員	福田勝則 (National Institutes of Health, Maryland, USA) 上野員義 (The Ohio State University, USA) 花田武浩 (University Hospital Utrecht, The Netherland)
部外研究生	宮之原郁代
関連病院出向	
鹿児島市立病院	原口兼明
国立南九州中央病院 (部長: 勝田兼司)	廣田常治, 鈴木晴博
国立都城病院	村野健三, 松崎 勉
国立療養所敬愛園	松根彰志
県立大島病院	森山一郎, 鱒坂孝二
県立北薩病院 (部長: 深水浩三)	宮崎康博
県立鹿屋病院	岩淵康雄
肝属郡医師会立病院	渡邊莊郁
薩摩郡医師会病院	今村洋子
藤元早鈴病院	今給黎泰二郎
国分中央病院	松崎信行
市比野温泉病院	福島泰裕

長浜病院

済生会川内病院

今村病院分院

今給黎病院

天辰病院

小幡悦郎

矢野博美, 鶴丸浩士

清田隆二

馬場園真樹子

牛飼雅人

VIII. 関連病院（平成3年4月現在）

- 国立南九州中央病院 〒892 鹿児島市城山町8-1 (0992-23-1151)
外来診療日：月～金（8:30～11:30）
手術日：月～金
- 鹿児島市立病院 〒890 鹿児島市加治屋町20-17 (0992-24-2101)
外来診療日：月～金（8:30～11:00）
手術日：月・水・金
- 国立療養所敬愛園 〒893-21 鹿屋市星塚町4522 (0994-49-2500)
外来診療日：水・木（8:30～17:00）
手術日：水・木
- 県立大島病院 〒894 名瀬市真名津町18-1 (0997-52-3611)
外来診療日：月～土（8:30～12:00）
手術日：月・水・金
- 県立北薩病院 〒895-25 大口市宮人502-4 (09952-2-8511)
外来診療日：月～土（8:30～11:00）
手術日：月・木
- 県立鹿屋病院 〒893 鹿屋市打馬一丁目5-10 (0994-42-5101)
外来診療日：月～土（8:30～10:30）
手術日：月・木
- 肝属郡医師会立病院 〒893-23 肝属郡大根占町神川135-3 (09942-2-3111)
外来診療日：火・水
- 薩摩郡医師会立病院 〒895-18 薩摩郡宮之城町虎居510 (0996-53-0326)
外来診療日：月・水～金（9:00～11:00, 14:00～16:00）
火・土（9:00～11:00）

○藤元早鈴病院 〒885 都城市早鈴町 17-1 (0986-25-1212)

外来診療日：月～金 (8:00～12:00, 14:00～17:30)

土 (8:00～12:00)

手術日：火

○国分中央病院 〒899-43 国分市中央一丁目 25-70 (0995-45-3085)

外来診療日：火・木・金 (9:00～12:00, 15:00～18:00)

○市比野温泉病院 〒895-13 薩摩郡樋脇町市比野 3079 (09963-8-1200)

外来診療日：月・水・金 (9:00～12:00, 14:00～18:00)

木・土 (9:00～12:00)

手術日：木

○鹿児島生協病院 〒891-01 鹿児島市下福元町 83-4 (0992-67-1455)

外来診療日：月・木・金 (8:45～12:00, 14:00～17:00)

土 (8:45～12:00)

手術日：火

○天辰病院 〒891-01 鹿児島市桜ヶ丘四丁目 1-8 (0992-65-3151)

外来診療日：月・水・金・土 (8:30～12:30, 14:00～17:30)

火 (14:00～17:30)

手術日：火・土

○加治木温泉病院 〒899-52 始良郡加治木町木田字松原添 4714 (0995-62-0001)

外来診療日：火～金 (14:00～16:30)

土 (9:00～12:00)

○天草慈恵病院 〒863-25 天草郡令北町上津深江 278-10 (0969-37-1111)

外来診療日：金 (14:00～17:00)

土 (9:00～12:00)

○垂水中央病院 〒891-21 垂水市錦江町 1-140 (0994-32-5211)
外来診療日：火～金 (14:00～16:00)
土 (9:00～12:00)

○長濱医院 〒893-23 肝属郡大根占町城元 904-1 (09942-2-0137)
外来診療日：月～土 (9:00～12:30, 14:00～16:00)
木 (休診)

○済生会川内病院 〒895 川内市原田町 327 (0996-23-5221)
外来診療日：月～土 (8:30～11:00)
アレルギー外来：月・金 (14:00～16:00)
手術日：火・木 (午後)

○今村病院分院 〒890 鹿児島市鴨池新町 11-23 (0992-51-2221)
外来診療日：月～土 (8:30～11:30, 13:30～16:30)
木 (13:30～16:30)

○今給黎病院 〒892 鹿児島市下竜尾町 4-1 (0992-26-2211)
外来診療日：月・水・金 (14:00～17:00)
火・木・土 (8:30～12:30)